

# M.A. バクーニンにおけるスラヴ問題

## —研究史と問題提起—

山本健三

### はじめに

本稿が考察対象としているミハイル・アレクサンドロヴィッチ・バクーニン（1814-76年）は、19世紀のアナーキズム運動における指導的イデオログとして、ロシア・ナロードニキ運動の理論家のひとりとして知られている。他方、バクーニンはそのほぼ全活動期において、スラヴ問題を背負った思想家でもあった。本稿は、バクーニンの思想像をスラヴ問題との関連性という文脈において捉え直そうとする試みである。

本稿における筆者の基本的視角は、次の通りである。バクーニンのスラヴ問題に対する関心のあり方は、彼の思想と活動がもつ次の3つの側面、すなわち、①古典的スラヴ主義的な国家観、歴史観、民族観、②革命的パン・スラヴ主義とよばれる、スラヴ諸民族連合国家の実現によるスラヴ人の解放と独立という政治的理想、③反ドイツ的言説とともに説かれるアナーキズムの教説、に現れているというものである。この視角において企図されているのは、バクーニンにおけるスラヴ問題に対する関心を彼の人物史における一エピソードとしてではなく、彼の世界観、政治哲学に触れる根源的問題として把握することである。

このような視角は、主にディヤコフのスラヴ問題に対する理解に負っている。それによれば、スラヴ問題は相対的に独立した4つの側面、すなわち「エトノス的文化的側面」、「国際関係にかかわる側面」、「思想的学術的、社会的政治的な諸理論にかかわる側面」、「特定の信念にしたがって生まれた政治解釈や、この信念に基づいて生じた思想と学問、社会と政治面での対立にかかわる側面」をもっているとされ、他方では、何らかの正確さをもった定義としては、はっきりとした内容は存在していないとされる<sup>1)</sup>。このような観点に立脚すれば、スラヴ問題とは多様かつ豊穣な諸側面をもつ問題と把握され、ある思想家のスラヴ問題との関係を論じる場合、それは単なる彼の一断面としてではなく、その世界観、思想の全体像との関連性において論じられるべき問題である。このような性格があるとするれば、この問題をバクーニンの政治哲学の文脈において考察することに一定の意味があるといえる。

これまでの研究史において、バクーニンの政治哲学的問題としてのスラヴ問題は十分に検討されてきたとはいえない。バクーニンにおけるスラヴ問題という論点はほとんど注目されないか、その「混乱」した生涯におけるエピソードとして扱われてきたにすぎない。本研究の存在意義もここに求められる。

以下の記述において、まずバクーニン研究史においてスラヴ問題がどのように扱われてきたかを検証し、この問題のアクチュアリティを確認する。次いでスラヴ問題が現れるバクー

1 ウラディーミル・アナトリエヴィチ・ディヤコフ著、早坂真理・加藤史朗訳『スラヴ世界：革命前ロシアの社会思想史から』彩流社、1996年、11-12頁。

ニンのロシア国家論、ロシア民族論、革命的パン・スラヴ主義的政治綱領、反ドイツ的言説が彼の政治哲学においてどのような意義をもっていたのか、という問題意識を念頭に置きながら論じていく。ただし、本稿では研究ノートという性格上、当該テーマに関する体系的、網羅的な論述はあらかじめ断念されている。また、副題にあるように、本稿の主たる目的は研究史からバクーニンにおけるスラヴ問題という論点を提起することにある。

## 1. バクーニン研究史におけるスラヴ問題

「ミハイル・バクーニンほどに世界に強い影響を及ぼした人物で、その生涯と思想がそれほどに混乱し、その見解の記録が不完全なものはいくつかない。バクーニンは多産だが、首尾一貫しない著作家であった」<sup>2)</sup>。このカーによるバクーニン評は、20世紀英米のバクーニン研究において、ステレオタイプと化しているといえる<sup>3)</sup>。というのは、多くの研究者にとってバクーニンにおける矛盾や混乱は自明であり、それらを哲学的に解明しようという営みはほとんどみられなかったからである。これは英米に限らず、ソ連およびロシア、日本のバクーニン研究においても事情はほとんど変わらない。このような研究状況において、スラヴ問題は、事実上、彼のアナキズム的世界観とは別の問題と位置づけられ、それを哲学的に跡付けようという試みがほとんどみられなかったのは当然であった。

帝政末期から1935年にかけての時期は、ソ連およびロシアにおけるバクーニン研究がもっとも活況を呈した時代であった<sup>4)</sup>。この時期、ステュクロフ、ポロンスキー、コルニエロフをはじめとする多くの研究者や批評家によって、夥しい量のバクーニン研究が発表された<sup>5)</sup>。このなかにはのちの伝記作家たちに多くの資料を提供することとなる重要な研究<sup>6)</sup>もあるが、バクーニンの政治思想の分析は彼らの主要課題ではなかった。

1935年以降、スターリン体制が確立されていくなか、ソ連におけるバクーニンへの評価は党派性を帯びてくる。「レーニン主義のイデオロギー活動家」として、近年、批判されて

2 E.H. カー著、大沢正道訳『バクーニン』現代思潮社、1965年、上巻、232頁。

3 政治学者サルトマンは、20世紀の欧米における主なバクーニン研究、アナキズム研究の著者たち、カー、ジョル、ノマド、マスターズ、メンデルらをバクーニンの思想における理論的矛盾や非一貫性、テキスト内の概念的な混乱に言及しつつ「パラドクス・コメンテーター」と揶揄し、彼らはその矛盾をもってバクーニンの政治思想を知的にも政治的にも無価値なものとみなそうとしている、と批判する [Richard B. Saltman, *The Social and Political Thought of Michael Bakunin* (Westport: Greenwood Press, 1983), p.7.]。

4 См.: Борисёнок Ю.А. Михаил Бакунин и «польская интрига»: 1840-е годы. М., 2001. С.12

5 筆者が確認したかぎりでは、以下のバクーニン研究がロシア語で発表されている: Драгоманов М.П. Михаил Александрович Бакунин: критико-биографический очерк. Казань, 1905; Кульчицкий Л. Михаил Бакунина: его жизнь и деятельность. СПб., 1906; Корнилов А.А. Молодые годы Михаила Бакунина: из истории русского романтизма. Л.-М., 1915; Карелин А. Жизнь и деятельность Михаила Александровича Бакунина. М., 1919; Горев Б.Г. М.А.Бакунин, его жизнь, деятельность и учение. Иваново-Вознесенск, 1919; Полонский В.П. Бакунин: из истории русской интеллигенции. М., 1922; Корнилов А.А. Годы странствий М.Бакунина. Л.-М., 1925; Стеклов Ю.М. М.А.Бакунин, его жизнь и деятельность 1814-1876. М., 1926-1927; Гроссман Л.Н. Бакунин и Достоевский. Л., 1925; Боровой А., *Отвержённый Н.* Миф о Бакунине. М., 1925; Малинин И. Комплекс эдипа и судьба Михаила Бакунина: к вопросу о психологии бунта. Белград, 1934.

6 例えば、カーの『バクーニン』は、ステュクロフのバクーニン伝に大きく依拠している (カー『バクーニン』、下巻[大沢正道による訳者あとがき]、687頁)。

いるヤロスラフスキーは<sup>7)</sup>、1848年の東欧革命に関与したバクーニンを「ナショナリスト」、「ショーヴィニスト」として非難している。「バクーニンは1848年の革命時にはブルジョア的ナショナリスト、ショーヴィニストであり、そののちには反ユダヤ主義者であり、…それは生涯変わることがなかった。反ユダヤ主義のかたちをとったナショナリズムの痕跡は、彼がアナーキズムの指導者になったときも消えなかったのである」<sup>8)</sup>。この「公式見解」以降、1940-50年代にわたって、ソ連におけるバクーニン研究は沈黙を余儀なくされることとなった。

ソ連におけるバクーニン研究の復活は、1966年、ピルモヴァのバクーニン伝<sup>9)</sup>によって告げられた。彼女は1970年にも詳細なバクーニン伝<sup>10)</sup>を著している。ピルモヴァのスラヴ問題という論点にかなするバクーニン評は、「アナーキズムの理論と冒険主義的戦術は否定するが、…この専制にたいする一貫した敵対者、スラヴ諸民族の解放をめざした活動的な闘士に敬意を表さないわけにはいかない」<sup>11)</sup>というものである。

しかし、当時のソ連において、バクーニンの活動に一定の肯定的評価を与える、あるいはまともな革命思想として扱うこと自体が異例であった。だからピルモヴァのバクーニン伝は、1972年の『共産主義者』誌上において、「民主革命的伝統の理論的基礎としてバクーニンの世界観を引き合いに出す輩に賛同することはできない」<sup>12)</sup>などと批判されたのである。逆にそこで高い評価を得たのは、次のようなジルベルマンの見解である<sup>13)</sup>。「民族問題にかなするバクーニンの諸見解は、国際主義、より正確にはコスモポリタニズムの思想と、明白にナショナリズムに傾倒した世界観という矛盾した要素とを気まぐれに結合させたものである」<sup>14)</sup>。これこそバクーニンにおけるスラヴ問題に対する1970年代初頭のソ連における公式見解であった。

ボリショノクによれば、1970年代初頭以降、バクーニンにたいする否定的評価が強まっていったのであるが<sup>15)</sup>、その転機となったのはジャンヒリヤンが1978年に発表した英米のバクーニン研究を批判した著書である。というのは、これはマルクス＝レーニン主義を擁護する観点から書かれているのであるが、他方でバクーニンに対する評価は従来のソ連的ステレオタイプとは一線を画しているからである。スラヴ問題という論点についていえば、ジャンヒリヤンは1848年の革命におけるバクーニンの「スラヴ連邦」の構想を官製パン・スラヴ主義と区別し<sup>16)</sup>、それを「空想的」としながらも、その本質は「民主主義的」であり、バクーニンの構想にある「革命性」を評価すべきであるとする<sup>17)</sup>。また英米のバクーニン研

7 R.W. デイヴィス著、内田健二・中嶋毅訳『現代ロシアの歴史論争』岩波書店、1998年、71頁、参照。

8 Ярославский Е. Анархизм в России. М., 1939. С.15.

9 Пирумова Н.М. Михаил Бакунин. жизнь и деятельность. М., 1966.

10 Пирумова Н.М. Бакунин. М., 1970.

11 Пирумова. Михаил Бакунин: С.155.

12 Смирнов А.Ф. За строгую научность, достоверность и историческую правду // Коммунист. 1972. №16. С.116

13 Смирнов. За строгую научность. С.118.

14 Зильберман И.Б. Политическая теория анархизма Бакунина. Л., 1969. С.107.

15 Борисёнок. Бакунин и «польская интрига». С.16.

16 Джангирян В.Г. Критика англо-американской буржуазной историографии М.А.Бакунина и бакунизма. М., 1978. С.45.

17 Джангирян. Критика англо-американской буржуазной. С.46.

究におけるスラヴ問題の評価について、ナショナリスト、人種差別主義者というレッテル貼りを行い、バクーニンを不当に過小評価していると批判する<sup>(18)</sup>。この見解は英米研究者に向けられたものであっても、ヤロスラフスキーやジルベルマンらの見解に対する批判にもなる。

1980年代後半から今日にかけて、ソ連崩壊にいたる現実的な政治変動を背景として、バクーニン再評価の気運が高まっている。それは革命家、イデオログとしてのバクーニンではなく、思想家、哲学者としてのバクーニンを再評価しようとする試みである<sup>(19)</sup>。その動向において、スラヴ問題という論点を中心に研究を展開するバクーニン研究者にポリシヨノク<sup>(20)</sup>がいる。彼の研究は現在のところ、1840年代のバクーニンにおけるスラヴ問題(特にポーランド問題)に向けられ、「バクーニン＝スラヴ・ナショナリスト、人種差別論者」というソ連時代よりつづくステレオタイプの解体を指向する。

英米におけるバクーニン研究も伝記や人物評を中心に展開された。先述のカー以降では、ランパート、ヘア、ジョル、メンデル、ケリーらがバクーニンの生涯と活動にかんする論稿を発表している<sup>(21)</sup>。ただし、いずれもカーによる伝記、スチュクロフ、ポロンスキー、コルニーロフらの伝記など、ほぼ同様の二次文献を土台にして書かれているので、新たな史実を発見することは少ない。

バクーニンにおけるスラヴ問題という論点にかんする議論は、主に彼の1840年代の革命的パン・スラヴ主義と反ドイツ的、あるいは反ユダヤ的傾向の評価をめぐる行われてきた。カーはその革命的パン・スラヴ主義について、バクーニンを反ドイツ的スラヴ・ナショナリストと規定している。そして彼がナショナリズム革命への信を捨てたのは、1863年のポーランド蜂起後のこととされる<sup>(22)</sup>。ただし、彼の革命的パン・スラヴ主義イデオロギーや反ドイツ的心情の内容やそれらのバクーニンのアナキズムにおける意義についての考察はほとんどなされていない。

18 Джангирян. Критика англо-американской буржуазной. С.54-55.

19 革命運動家、興味深い人物としてのみバクーニンを扱おうとする人物論的なアプローチとは一線を画し、バクーニンの思想、哲学の像を呈示しようとした、もしくはその必要性を論じたロシア語文献として、次の諸研究が挙げられる: Графский В.Г. Бакунин. М., 1985; Пустарнаков В.Ф. М.А.Бакунин как философ // Бакунин М.А. Избранные философские сочинения и письма. М., 1987; Исаев А.И., Олейников Д.И. Бакунизм нуждается в более серьезном изучении // Вопросы истории. М., 1989. №2; Пирумova Н.М. Социальная доктрина М.А.Бакунина. М., 1990; Шириняц А.А. Очерки истории социально-политической мысли России XIX века. М., 1993; Борисёнок Ю.А., Олейников Д.И. Михаил Александрович Бакунин // Вопросы истории. М., 1994. №3; Бокучава Г.Ш. Потическая философия М.А.Бакунина и современность. М., 1999.

20 ポリシヨノクの主な論考には次のものがある: Борисёнок Ю.А. Контакты М.А.Бакунина с представителями польского освободительного движения накануне революции 1848-1849 годов // Советское славяноведение. 1991. №2; Чертово колесо. современный взгляд на «Исповедь» Михаила Бакунина Николаю I // Родина. 1997. №12; Михаил Бакунин и «польская интрига»: 1840-е годы. М., 2001.

21 E.Lampert, *Studies in Rebellion* (London: Routledge and Kegan Paul, 1957); Richard Hare, *Portraits of Russian Personalities between Reform and Revolution* (London: Oxford University Press, 1959); James Joll, *The Anarchists* (London: Eyre & Spottiswoode, 1964) [邦訳: ジェームス・ジョル著、萩原延壽・野水瑞穂訳『アナキスト』岩波書店、1975年]; Anthony Masters, *Bakunin: the Father of Anarchism* (London: Sidgwick and Jackson, 1974); Arthur P. Mendel, *Michael Bakunin: Roots of Apocalypse* (New York: Praeger, 1981); Aileen Kelly, *Mikhail Bakunin: A Study in the Psychology and Politics of Utopianism* (Oxford: Clarendon Press, 1982).

22 カー『バクーニン』、上巻、241-244頁。

他方、ランパートによれば、バクーニンは1840年代において、すなわちアナキストになる以前、既にナショナリズムを信用していなかったとされる<sup>(23)</sup>。また反ドイツ的、反ユダヤ的な言動は、マルクス、ラサール、リープクネヒト、ワルトハイム、ヘス、ウーチンらとの不和に端を発するとされ、幾分か戦術的な方便として用いられたとされる<sup>(24)</sup>。しかし、これらについて、一次資料による論証はなされていない。「戦術的」であるという根拠として、「ドイツ人への深い憎悪ほど、スラヴ人を団結させるものはない」という、義妹に宛てたとされる書簡の一節が紹介されているが<sup>(25)</sup>、この書簡がいつ書かれたのか、一切記されておらず、なぜこれが根拠となるのか、筆者には不明である。

ヘアによれば、バクーニンの構想した「スラヴ連邦」は、ロシアの「使命感」にもとづく民族的な性格のものではなく、漠然とした種族的な連邦であるという<sup>(26)</sup>。そしてこの連邦は「スラヴ評議会」という無制限の権力をつかさどる機関によって統治される、連邦というより超国家というに相応しい独裁体制の構想であったとされる<sup>(27)</sup>。ただし、この研究も典拠の明示がなく、説得力がない。

ジョルもまた、バクーニンにおける「スラヴ派的な熱情」と「反ドイツ的な感情」を指摘する<sup>(28)</sup>が、この問題についてそれ以上の追求はない。また資料的にも二次文献に依拠した部分が目立ち、本格的な研究とはいえない。

メンデルとケリーの研究は、バクーニンの「矛盾」した人格を精神分析的方法論によって解明するというコンセプトをもっている<sup>(29)</sup>。いうまでもなく、彼らの研究において、バクーニンは反ドイツ的、反ユダヤ的偏見に凝り固まった人物というステレオタイプの像によって描かれ、彼のアナキズムは政治思想としては重要でないものとされ<sup>(30)</sup>、ほとんど考察の対象と位置づけられていない。

1930年代のカーの評伝から80年代のケリー、メンデルにいたる英米におけるバクーニン研究の状況を概観したが、バクーニンにおけるスラヴ問題という論点について一致した見解はいまもないというより、論点として十分に検討されてきたとはいえない状況である。

80年代から今日に至る英米のバクーニン研究は、伝記、評伝を中心としたそれ以前のバクーニン研究とは一線を画する。そこには現代ロシアにおけるバクーニン研究動向と同様に、思想家、哲学者としてのバクーニンを再評価しようとする研究者が現れてきた。この動向を代表する研究者として、サルトマン、ニューマン、マクロフリンらを挙げることができる。サルトマンは当時（1983年）、一般的とはいえない見解を呈示した。例えば、バクーニンの世界観形成におけるフォイエルバッハやラマルクの重視や<sup>(31)</sup>、しばしばバクーニン主義の革命理論破綻の証左として受けとめられてきた「秘密結社」の権威主義的、陰謀的性格の

23 Lampert, *Studies in Rebellion*, p.146.

24 Lampert, *Studies in Rebellion*, p.144.

25 Lampert, *Studies in Rebellion*, p.144.

26 Hare, *Portraits of Russian Personalities*, p.28.

27 Hare, *Portraits of Russian Personalities*, p.31.

28 ジョル『アナキスト』、95頁。

29 Kelly, *Mikhail Bakunin*, p.193; Mendel, *Michael Bakunin*, p.27.

30 Kelly, *Mikhail Bakunin*, p.3.

31 Saltman, *The Social and Political Thought*, pp.23-30.

否定<sup>(32)</sup>、などである。ニューマンはバクーニンをはじめとするアナキストの哲学を権力の哲学と捉え、言説、観念、行為における権力性を暴露しようとするポスト構造主義的政治哲学の先駆的な政治哲学として位置づけている<sup>(33)</sup>。マクロフリンはバクーニンをデイドロ、フォイエルバッハ、コントらにつらなる自然主義哲学者として位置づけ、彼の歴史哲学と社会哲学に人間中心主義批判につながる論理を見出す<sup>(34)</sup>。

サルトマン、ニューマン、マクロフリンは伝記や評伝ではなく、バクーニン自身のテキストを重視し、つまり、従来の伝記に支配的であったステレオタイプにとらわれることなく、政治哲学者としてのバクーニンの再評価を試みている。しかし、彼らの研究において、バクーニンにおけるスラヴ問題という論点にかなする記述はみられない。現代の政治哲学的バクーニン研究において、スラヴ問題は研究対象として認知されていない。

日本におけるバクーニン研究は主に勝田吉太郎、大沢正道、左近毅らによって担われてきた<sup>(35)</sup>。勝田は、バクーニンの人物像を説明する部分で、「その活動の足跡をヨーロッパ全域にしるしづけ、確乎たる国際的革命を衝動したのであったが、しかも彼はドイツ人とユダヤ人とを憎悪呪詛するスラヴのショヴィニストであった」<sup>(36)</sup>と述べているが、この理解は先述のソ連史学者や英米の伝記作家にみられたステレオタイプと変わらない。大沢、左近による研究においてもこの問題についての論及はほとんどみられない。

ソ連およびロシア、英米、日本におけるバクーニン研究史を概観してきたが、あきらかなように、バクーニンにおけるスラヴ問題は政治哲学的分析の俎上に載せられたことはなかった<sup>(37)</sup>。

---

32 Saltman, *The Social and Political Thought*, p.167.

33 S. Newman, *From Bakunin to Lacan: Anti-authoritarianism and the Dislocation of Power* (Lanham: Lexington Books, 2001), p.6.

34 P. McLaughlin, *Mikhail Bakunin: The Philosophical Basis of His Anarchism* (New York: Algora, 2002).

35 勝田、大沢、左近によるバクーニン関連の研究には、以下のものがある。勝田：「バクーニンとその無政府主義」(『近代ロシア政治思想史：西欧主義とスラヴ主義』創文社、1961年、所収)；「マルクス対バクーニン」(『革命とインテリゲンツィヤ』筑摩書房、1966年、所収)；「アナキスト」筑摩書房、1966年、新版、社会思想社、1974年；「バクーニンの革命理論：マルクス主義との対比において」(『季刊 社会思想』2-2、1972年、所収)；『人類の知的遺産 49 バクーニン』講談社、1979年。大沢：『バクーニンの生涯』論争社、1961年；『アナキズム思想史：自由と反抗の歩み』現代思潮社、1971年。左近：「バクーニンとネチャーエフ：『革命家の教理問答書』をめぐって」(『ロシア語ロシア文学研究』第6号、1974年、所収)；「第一インターナショナルのロシア支部(1)：そのミハイル・バクーニンとの関係」(『人文研究』第28巻第10分冊、1976年、所収)；「バクーニンの政治綱領：人類解放国際秘密結社綱領について」(『一橋論叢』第76巻第3号、1976年、所収)；「バクーニンとマルクス：ネチャーエフとの関係をめぐって」(『ロシア語ロシア文学研究』第8号、1976年、所収)；「バクーニンとネチャーエフ：第一インターナショナルへの波紋」(金子幸彦編『ロシアの思想と文学』恒文社、1977年、所収)；「第一インターナショナルのロシア支部(2)：そのミハイル・バクーニンとの関係」(『人文研究』第30巻第10分冊、1978年、所収)；「ミハイル・バクーニンとスタンケーヴィチ・サークル：ロシアにおけるシェリング受容史の一断面」(『人文研究』第35巻第11分冊、1983年、所収)。

36 勝田『近代ロシア政治思想史』、189頁。

37 筆者は2001年、ロシア語で執筆した論稿(Ямамото К. Политическая философия Бакунина. М., 2001)において、バクーニンの革命的パン・スラヴ主義、反ドイツ的言説を政治哲学的考察の俎上にのせている。本稿はその考察に大幅な加筆と修正を加え、再構成したものである。

## 2. スラヴ主義の系譜とバクーニン

バクーニンのロシア思想史における位置づけは、一筋縄ではいかない問題である。少なからぬ研究者が西欧派の系譜に位置づけているものの<sup>38)</sup>、多くの場合、その筆致は些か歯切れが悪い。例えばレヴィツキーは、バクーニンを「心理においてロシア人のなかのロシア人であったが、その社会的政治的プランにおいて、西欧派に位置づけざるを得ない」<sup>39)</sup>としている。コプレストンは、バクーニンを「スラヴ主義者ではないという意味での西欧主義者」<sup>40)</sup>と規定する。

その一方で、スラヴ主義の系譜とバクーニンを結び付ける見方もある。例えば「バクーニンには極めて強力なスラヴ派的な要素があった。彼の革命的メシアニズムはロシア=スラヴ的であった」<sup>41)</sup>と述べるベルジャーエフのように、バクーニンの革命イデオロギーをスラヴ派的と断言する評者がいる。ベルジャーエフは別の場所で「スラヴ派の人々の君主主義は、その根柢および内面的パトスにおいて、アナーキズム的であり、それは権力に対する嫌悪感に端を発していた」<sup>42)</sup>と述べて、スラヴ主義者であったアナーキズム的性格をも指摘する<sup>43)</sup>。ゾトキンはバクーニンの世界観形成における重要な要素の1つとして、アクサーコフ、キレーエフスキー、ホミャコフら古典的スラヴ主義者との交流を挙げる<sup>44)</sup>。また、スラヴ主義の発展形態の1つがバクーニンの革命的パン・スラヴ主義であるという外川継男の指摘もある<sup>45)</sup>。

当のバクーニン自身は1867年のある書簡において、古典的スラヴ主義者<sup>46)</sup>の1人、コンスタンチン・アクサーコフが1830年代、「既にペテルブルク国家と国家制度全般に対する敵

38 注39と40で挙げた文献以外では、勝田『近代ロシア政治思想史』；外川継男『ロシアとソ連邦』講談社学術文庫、1991年；ルネ・ザパダ著、原田佳彦訳『ロシア・ソヴィエト哲学史』白水社文庫クセジュ、1997年、などにおいて、バクーニンは西欧主義の系譜に位置づけられている。

39 *Левитский С.А. Очерки по истории русской философии. М., 1996. С.96 (Оригинал: 1968).*

40 Frederick C. Copleston, *Philosophy in Russia: From Herzen to Lenin and Berdyaev* (Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1986), p.89.

41 *Бердяев Н.А. Истоки и смысл русского коммунизма // Бердяев Н.А. Философия свободы. Истоки и смысл русского коммунизма. М., 1997. С.299 (Оригинал: 1937).*

42 *Бердяев Н.А. Русская идея. Основные проблемы русской мысли XIX века и начала XX века // Бердяев Н.А. Русская идея. Судьба России. М., 1997. С.127 (Оригинал: 1946).*

43 スラヴ主義者と呼ばれる思想家たちが一枚岩的にアナーキズム性を帯びていたわけではない。古典的スラヴ主義者との相違について論じた清水昭雄の論考によると、スラヴ派はアナーキズム的な傾向をもつアクサーコフの思想と、国家主導の改革を図るサマーリンの思想とに分化した（清水昭雄「ビョートル大帝とその改革に関する古典的スラヴ主義者の見解について」『一橋論叢』第97巻第5号、1987年、109頁）。

44 *Зоткин А.А. Бакунин // Политическая мысль в России: Словарь персоналий (XI в.-1917 г.). М., 2000. С.22.*

45 外川『ロシアとソ連邦』、246頁、参照。

46 ロシアのスラヴ主義研究者、ドゥジンスカヤによれば、何をもって「古典的」とそれ以外のスラヴ派を区別するのか、という問題は未解決のままである。スラヴ派の区分は、厳密な内容の吟味や時代区分にもとづいて行われているわけではなく、研究者は1860年頃を境として、それまでに死んでしまったキレーエフスキー、ホミャコフ、コンスタンチン・アクサーコフらを旧世代、それ以後も生き残っていたスラヴ主義者を次世代とみなしているという（*См.: Дудзинская Е.А. Славянофилы в пореформенной России. М., 1994. С.12.*）。清水昭雄も古典的スラヴ主義の時代を1838、39年から1861年の農奴解放までと見做す（清水「ビョートル大帝とその改革に関する古典的スラヴ主義者の見解について」、109頁注）。ヴァリツキは「近代の資本主義的文明の諸制度や諸価値に反対する回顧的ユートピアであり、失われた調

であったのであり、その点では我々の先を行っていたのだ<sup>(47)</sup>と認めている。

確かにアクサーコフとバクーニンの世界観、歴史観には類似点がある。第一に、両者の政治哲学に国家制度自体に対する否定的な原理が含まれていることである。アクサーコフは次のように述べて、国家権力と人間的、精神的自由とは元来、相容れないという国家観を呈示している。「民衆が自分のために望むのはただ1つ。生活、精神、言葉の自由である。民衆は国家権力に口出しすることなく、国家が自分たちの主体的な生活様式と魂に干渉しないことを望んでいる<sup>(48)</sup>。さらにはより直接的に「…国家とは束縛、外的強制の端緒である。…形態のよしあし、どのような形態が真で、あるいは虚偽であるか、という問題ではなく、国家は国家として虚偽であるといわなくてはならない<sup>(49)</sup>と述べている。他方、バクーニンは「彼ら [マルクス主義者—山本] の人民国家も含めて、いかなる国家も抑圧なのだ。すなわち一方では専制を、他方では奴隷制を生み出すのだ<sup>(50)</sup>と述べてマルクスを批判した。この批判の根底にあるのは、自由と国家が相容れないという、次のような確信である。「すべての人間または共通の権利の名の下に各人の自由が否定される。これが国家である。つまり、国家が始まるところ、個人の自由は終わる。そしてその逆もしかりである<sup>(51)</sup>。

アクサーコフとバクーニンの第二の類似点とは、両者ともにロシア民族ないしはスラヴ民族を非国家的民族と把握していることである。アクサーコフによれば、ロシア史において「一度として民衆の政治的権利を権力に対して要求したことはなく<sup>(52)</sup>、「一度たりとも何らかの形で民衆が統治に参画するという試みも行われなかった<sup>(53)</sup>とされ、ロシア民族は「非国家的な、政治に参加しようとしなない、政府の権力を諸条件によって制限しようとしなない、一言で言えば、些かの政治的要素ももたないが故に、革命あるいは国家的機構のかけらもない民族」であると結論される<sup>(54)</sup>。バクーニンもまた、「性質や本性のどこを見ても、スラヴ人は全く非政治的な、すなわち非国家的な人種である。…どのスラヴ人も自ら国家を建設したことはない<sup>(55)</sup>と述べて、スラヴ民族を非国家的と規定する。

---

和をとりもどそうとする熱望であり、保守的ロマン主義のロシア的変種」(ヴェリツキ著、今井義夫訳『ロシア社会思想とスラヴ主義』未来社、1979年、24頁)と、古典的スラヴ派のキレーエフスキー、ホミャコフ、コンスタンチン・アクサーコフのスラヴ主義を定義している。彼もまた1860年前後において、すなわちアレクサンドル2世の治世下における政治状況の変化において、スラヴ主義も転換期を迎えたとみる。すなわち、一方ではパン・スラヴ主義へ、他方では貴族的自由主義の右翼的変容に変容したとされる(ヴェリツキ『ロシア社会思想とスラヴ主義』、25頁)。

47 Письмо 3 мая 1867 // Письма М.А.Бакунина к А.И.Герцену и А.П.Огареву, с приложением его памфлетов, биографическим введением и объяснительными примечаниями М.П.Драгоманова. Женева, 1896. С.201.

48 Аксаков К.С. Записка К.С.Аксакова о внутреннем состоянии России, представленная Государю Императору Александру II в 1855 г. // Русь. 1881. №26-27. №27. С.19.

49 Аксаков К.С. По поводу VII тома истории России, г. Соловьева // Аксаков К.С. Полное собрание сочинений. В 3 томах. М., 1875-1889. Т.1. С.241.

50 Бакунин М.А. Государственность и анархия // Бакунин М.А. Философия, социология, политика. М., 1989. С.483.

51 Бакунин М.А. Федерализм, социализм и антитеологизм // Бакунин. Философия, социология, политика. С.88.

52 Аксаков. Записка. №26. С.12.

53 Аксаков. Записка. №27. С.19.

54 Аксаков. Записка. №27. С.19.

55 Бакунин. Государственность и анархия. С.330.

第三の類似点は、ピョートル改革以降のロシア国家と社会に対する見解である。アクサーコフにとって、ピョートル改革は諸悪の根源であった<sup>(56)</sup>。絶対君主制——政府に無制限の国家権力を委託するかわりに、国民は道徳的自由、生活、精神、言論の自由を享受するとされる<sup>(57)</sup>——こそ、ロシア人の非政治的性格に相応しい国家秩序と見做すアクサーコフにとって、ロシア人に異質なヨーロッパ的なものを押し付けるピョートル改革は、「足かせを最も重い足かせに付け替えたに過ぎなかった」<sup>(58)</sup>のであった。他方、バクーニンはピョートル改革以降のロシア国家を「ドイツ国家の名の下に、人民を否定し絞め殺す体制」<sup>(59)</sup>と形容する。また、2世紀にわたってロシアから活気を奪っているのは「ピョートル国家の牢獄舎」<sup>(60)</sup>であるとも述べている。つまり、アクサーコフ、バクーニンの両人はともに、ロシア人にとって異質な原理を持ち込んだという意味で、ピョートル改革に批判的な見解を共有していたのであった。

このように、アクサーコフとバクーニンとのあいだに類似した世界観をみいだすことができる。しかし、これをもってアクサーコフがバクーニンの理論的先駆者で、前者が後者に理論的影響を及ぼしたとの見解は早計である。このような見解は古くよりボグチャルスキーや勝田吉太郎によって提示されてきたが、この両者がその論拠として挙げたのは、前述の「ペテルブルク国家と国家制度全般に対する敵であった」とアクサーコフを評したバクーニンの書簡である<sup>(61)</sup>。彼らの思想における類似性と、1830年代後半、スタンケヴィッチのサークルで交流していたという同時性は、必ずしも両者の思想的相互性、相関性を裏付けうる根拠にはなりえない<sup>(62)</sup>。ここではバクーニンとスラヴ主義者アクサーコフの世界観との近縁性について指摘しておくにとどめる。

### 3. 革命的パン・スラヴ主義者におけるスラヴ問題 — 『新スラヴ政策の基礎』 —

バクーニンの革命的パン・スラヴ主義は、研究史においてみたように、しばしばスラヴ・ナショナリズムと位置づけられてきた。しかし、その評価はバクーニンのイデオロギーの十分な検討によって導かれたものではなかった。ここではバクーニンによる革命的パン・スラヴ主義の基本原則が要約され、さまざまなヨーロッパ言語に訳された、『新スラヴ政策の基礎』(1848年)という綱領的文書を通じて、バクーニンの革命的パン・スラヴ主義について考察する。

まずこの文書に顕著な性格は、反国家性である。バクーニンは、多くのスラヴ民族が19世紀半ばにおいて他民族の隷属下にあるのは、結局のところ、スラヴ諸民族が分断されてい

56 Аксаков. Записка. №27. С.17.

57 Аксаков К.С. Дополнение к Записке о внутреннем состоянии России, представленная Государю Императору Александру II К.С.Аксаковым // Русь. 1881. №28. С.12.

58 Аксаков К.С. Взгляд на русскую литературу с Петра Первого // Аксаков К.С. Эстетика и литературная критика. М., 1995. С.156.

59 Бакунин М.А. Народное дело: Романов, Пугачев или Пестель? Лондон, 1862. С.9.

60 Бакунин. Народное дело. С.11.

61 Богучарский В. Активное народничество семидесятых годов. М., 1912. С.18-21; 勝田『近代ロシア政治思想史』、591頁。

62 Peter K. Chistoff, K.S.Aksakov: A Study in Ideas (Princeton: Princeton University Press, 1982), pp.40-43.

るため、種として近い民族同士であることを忘却しているからであると分析する<sup>(63)</sup>。その意味でバクーニンはスラヴ諸民族の団結を主張するが、その手段としては中央集権的な国家機構を志向しない。国家原理を明確に否定したわけではないが、「新しいスラヴ諸種族の政治は、国家的な政治ではなく、諸民族の政治、自由で独立した人々の政治になるだろう」<sup>(64)</sup>と述べて、反国家的な志向を表明する。また、同年のある書簡に認められた「…アナーキーが、諸国家の破壊が早晚、訪れなければならない」<sup>(65)</sup>という言葉にはバクーニンのアナーキー志向が窺える。

次にこの文書に顕著なのは、集団主義の原理である。バクーニンの構想によれば、このスラヴ連合は「あるものの幸福あるいは不幸が、同時に他者にとっても幸福あるいは不幸であるほどに緊密」な結合でなければならないとされる<sup>(66)</sup>。また「共同的なつながりによって結ばれたスラヴ諸民族に隠れて別の同盟を結ぶこと」<sup>(67)</sup>、「外交的手段や武力によって他のスラヴ民族を従わせようとする」こと<sup>(68)</sup>、「団結した諸民族に対するヘゲモニーを志向すること」は<sup>(69)</sup>、スラヴ世界に対する「犯罪」もしくは「裏切り」<sup>(70)</sup>とされる。のちにアナーキズムを標榜するバクーニンは、「私が自由であるのは、私を取り巻く全ての人間が、男女問わず、平等に自由であるときだけである。他人の自由とは私の自由の制限あるいは否定ではないばかりか、それにとって不可欠な状況であり、確信である」<sup>(71)</sup>と述べて、個人の自由は社会集団においてのみ実現されうるといふ集団主義的な自由観を提起し、自らのアナーキズム的世界観の基礎に据えた。1840年代後半におけるスラヴ連合構想は、個人と民族の違いはあるが、これにあてはまる。

このように、反国家主義と集団主義のきざし、すなわちバクーニンのアナーキズムにおける基本理念の萌芽は、革命的パン・スラヴ主義の政治綱領において既にみられる。他方、バクーニンのスラヴ連邦構想には、アナーキズムとは根本的に区別される思想が盛り込まれている。スラヴ連邦の構想においては、「スラヴ評議会（Славянский совет）」というスラヴ諸民族の代表機関が、スラヴ世界における最高権力および最高裁判所の機能を担い、全てのスラヴ人はこの「評議会」の命令と決定に従うことを義務づけられていると明記され<sup>(72)</sup>、この「スラヴ評議会」は外国に対して、「国権の発動」たる宣戦布告を行う権限が付与されている<sup>(73)</sup>、要するに、連邦の主権的主体が明示されている。

このように、バクーニンのスラヴ連邦構想は、スラヴ世界の共同性の具現化を企図するスラヴ諸民族の連邦国家案といえる。しかし、これをもってバクーニンをスラヴ・ナショナリ

63 Бакунин М.А. Основы новой славянской политики // Бакунин М.А. Собрание сочинений и писем. В 4 т. Т.3. Под ред. Ю.М. Стеклова. М., 1934-1935. С.301.

64 Бакунин. Основы новой славянской. С.301.

65 Бакунин М.А. Письмо Георгу Гервергу // Бакунин. Собрание сочинений и писем. Т.3. С.366.

66 Бакунин. Основы новой славянской. С.302.

67 Бакунин. Основы новой славянской. С.302.

68 Бакунин. Основы новой славянской. С.303.

69 Бакунин. Основы новой славянской. С.303.

70 Бакунин. Основы новой славянской. С.303.

71 Бакунин М.А. Бог и государство (2) // Бакунин М.А. Избранные философские сочинений и писем. С.501.

72 Бакунин. Основы новой славянской. С.302.

73 Бакунин. Основы новой славянской. С.303.

ストと規定することは早計である。というのは、1848年の別の論文において、「革命運動は、ヨーロッパが、ロシアも含む全ヨーロッパが連邦的民主主義的共和国になるその時まで、終わることはないであろう」<sup>74)</sup>と述べて、ヨーロッパ革命の必要性を示唆しているからである。つまり、バクーニンの革命構想は、スラヴ民族の団結を主張していた時代でさえ、ヨーロッパ全体における革命をも想定していたのである。

バクーニンの革命的パン・スラヴ主義は、スラヴ・ナショナリズムとしてではなく、むしろ、アナキズムへといたる過渡的なイデオロギーとしてとらえられるべきである。

#### 4. アナキストにおけるスラヴ問題—反ドイツ的言説—

バクーニンはスラヴ・ショーヴィニスト、反ユダヤ主義者、反ドイツ主義者など、好戦的な人種的偏見にみちた人物として批判され、これらの人物像は根強いステレオタイプのなバクーニン像になっている。確かにバクーニンはしばしばドイツとドイツ人に否定的な評価をくだしている。しかし、近年、このステレオタイプのなバクーニン像の妥当性に疑問をなげかける業績もみられる。例えば、ポリショノクは1840年代におけるバクーニンの活動の研究を通じて、その時期におけるバクーニンの民族問題にかんする見解には民族的優越を唱導するような教説は含まれていないと指摘している<sup>75)</sup>。ここでは、全活動期を通じてバクーニンの著作にみられる反ドイツ的言説を俎上にのせ、アナキスト=バクーニンにおけるスラヴ問題について考察する。

1851年、バクーニンは『告白』という文書において、次のように述べている。「スラヴ人には実によくわかる感情が、ドイツ人への憎悪である。…ドイツ人に対する憎しみは、スラヴ統一とスラヴ諸民族の相互理解の第一の根拠である…私は…遅かれ早かれ、スラヴ人がドイツのくびきを脱し、もはやプロイセンもオーストリアもトルコも怖れるに足らなくなる日の来ることを確信している」<sup>76)</sup>。

ここで注目すべきは、この反ドイツ的言説に「スラヴ対ドイツ」という対立の構図が織り込まれていることである。『告白』は、ドレスデン蜂起（1849年）の失敗後、逮捕され、ペテロパウロフスク要塞のアレクセイ三角堡に幽閉されていたとき、ニコライ一世の命令で書かされたという成立過程の特殊さゆえに、文字通りに解釈することが妥当であるか否かという問題はある。またドイツ嫌いであったと伝えられるニコライ一世の反応を計算したという側面も無視できない。しかし他方では、バクーニンの反ドイツ的な見解を自己欺瞞的な見解とみなす根拠もないと思われる。なぜなら、この当時のバクーニンが革命的パン・スラヴ主義の革命家であり、まさにドイツ人の敵としてふるまっていたからである。しかし、さしあたりバクーニンの本心がどうであったかという問題は重要ではない。というのは、彼の本心がどうであれ、すなわち、本物のゲルマノフォビアであるか、方便であるかにかかわらず、この反ドイツ的な言説における「スラヴ対ドイツ」の構図は、『告白』以降も彼の著作

74 Бакунин М.А. Мировое значение февральской революции // Бакунин. Собрание сочинений и писем. Т.3. С.296.

75 Борисенко. Бакунин и «польская интрига». С.111.

76 Бакунин М.А. Исповедь // Бакунин. Собрание сочинений и писем. Т.4. С.133-134.

群にしばしばあらわれ、とりわけ20年余りの後に発表された最晩年の著書、『国家制度とアナキー』（1873年）において、より露骨かつ率直な表現をもって繰り返されたからである。

『国家制度とアナキー』におけるバクーニンの反ドイツ的言説は、次のようなものである。「ドイツ人は国家に生と自由を求める。スラヴ人にとって国家は墓場である」<sup>(77)</sup>、「…我々はスラヴ人プロレタリアートのこの党[マルクスの一派を指す—山本]への自殺的な加入を阻止するため、尽力するであろう。この党は断じて人民的ではなく、その方向性、目的、手段においても純然たるブルジョアであり、加えてこの上なくドイツ的、すなわちスラヴ人には死である」<sup>(78)</sup>、「…ロシア人も完全にスラヴ人である。ドイツ人が嫌なのだ」<sup>(79)</sup>、「…ドイツ人たちの侵略の脅威に共に対峙しているスラヴ諸民族とラテン諸民族の同盟は切に必要とされるであろう」<sup>(80)</sup>、「…ドイツ人は非常に高度な国家的な民族であって、この国家性がこの民族にあって他のどのような情熱をも凌駕し、自由の本能をも完全に押さえ込んでしまうのである」<sup>(81)</sup>。

このように、反ドイツ的言説には「スラヴ人＝非国家的民族」、「ドイツ人＝国家的民族」という、古典的スラヴ主義者にも通じる民族観が表現され、「スラヴ対ドイツ」という対立の構図がリフレインされている。

### まとめにかえて

本稿において明らかにされたのは次の3点である。

第一に、バクーニンは古典的スラヴ派、とくにコンスタンチン・アクサーコフに近い国家観、スラヴ民族観を抱いていたが、それは国家制度全般に対する否定的評価、ロシア人を含むスラヴ民族を「非国家的民族」と把握する民族観、ピョートル改革以降のロシア国家と社会に対する否定的見解を含むものであって、バクーニンが1860年代後半以降に表明するアナキズムの世界観との近縁性を窺わせるものであった。

第二に、1840年代から60年代半ばにおけるバクーニンの「革命的パン・スラヴ主義」は、しばしばスラヴ・ナショナリズムと位置づけられてきたが、既にのちのアナキズム的原理の萌芽（反国家主義、集団主義、スラヴ革命のみならぬヨーロッパ革命の必要性の認識）を含み、ナショナリズムとは一線を画することが明らかとなった。それはむしろアナキズムの過渡的形態というべきものである。

第三に、バクーニンのほぼ全活動期にみられた反ドイツ的言説は従来、彼のショヴィニスト的、ナショナリスト的、人種主義的性向の現れとされ、彼の理論家としての浅薄さの証左として扱われてきたが、スラヴとドイツとの対抗関係において現れるという一貫した論理性をもち、バクーニンのスラヴ主義者的な側面を表現している。

これらはバクーニンにおけるスラヴ問題が、そのアナキズム政治哲学から切り離されて論じられるべきものではないことの証左になるであろう。その意味で本稿は、矛盾と混乱に

77 *Бакунин. Государственность и анархия. С.337.*

78 *Бакунин. Государственность и анархия. С.343.*

79 *Бакунин. Государственность и анархия. С.372.*

80 *Бакунин. Государственность и анархия. С.372.*

81 *Бакунин. Государственность и анархия. С.389.*

みちた一貫性のない思想家という、従来において一般的なバクーニン観に対する批判の嚆矢と位置づけられよう。

最後に、本稿を出発点として今後の研究課題として、古典的スラヴ主義者とバクーニンとのあいだの理論的交流の実態の解明、スラヴ問題をめぐるバクーニンの歴史的具体的文脈との関連における思想と活動の分析、バクーニンにおける「国家性」あるいは「ドイツ性」の概念の明確化、などが挙げられよう。今後は英米圏以外のバクーニン研究も視野に入れながら、上記の問題を研究していきたい。